村上春樹 著　ノルウェイの森　“生命の連続性と生死観”

先端技術科学教育部　物質生命システム工学専攻　　新田 馨久

人は生まれてから死ぬまでに多くの感情に揺さぶられながら日々を過ごす。その中でも、苦しみや悲しみといった感情は、常に我々の命を試すかのように振舞う。「人は何故生まれて生きて死ぬのか」。誰しもが一度は抱くその疑問に対するひとつの真理を、この「ノルウェイの森」は示しているように感じた。

この本の主人公・ワタナベの心情や状況は、ある意味私たちが体感する「現実」からかけ離れているように思える。にも関わらず、そこに内在する人の生死や感情は、我々がかなり身近に感じる「命」というものの在り方を表しているようにも思える。それは、ワタナベが「自身と関係を持った友人らの死(自殺)」や「セックス」「出会い」を通して、「生」というものが如何なるものなのかを、時間をかけて、ゆっくりと、緻密に、感じ取っているからなのだろう。

この話の序盤に、ワタナベ(もしくは村上春樹)が読者に最も伝えたいであろう一文が、太字で書かれている。

“死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。”

ストーリーは、ワタナベが37歳でドイツに向かっているところから始まり、そして、彼の青春時代とでも言える高校から大学時代の回想に入っていく。「人生で一番大切な時期」とよく言われるその時期に、ワタナベは唯一とも言える友人・キズキを失い、その恋人・直子に恋をし、体を重ね、最終的には直子をも失うのである。

しかしここで大切なのは、彼はこのストーリーの中で、様々な出会いや関係を通しながら、37歳現在に至るまで、「生きている」、ということである。

キズキと直子の死の間に挟まれるという衝撃的な経験を持ちながらも、その時の記憶・精神・感情、それらが時間の経過と共に確実に色褪せていっている…。そのことを見つめた上で今を生き、自身の命のありようを感じ取っているワタナベは、ある意味「死と共存して生きている」と言ってもよいのではないか。そしてそれは、我々自身が感じる日常の「生」に関しても、同様に言えることではなかろうか。

「生まれて生きて死ぬ」。この一連の流れは、今現時点の我々にはどうしようもない確固たる事実である。そして我々は、「死ぬ」ということが、「ひとつの生」の完全な終わりだと信じてやまない。しかし、このノルウェイの森は、私たちに「果たしてその思考が正しいのか?」と問いかけているように思える。

誕生と死の間が「生きている」という状態であるならば、死と誕生の間には本当に何もないのか。ここで私は霊魂だとか幽霊、天国・地獄の話がしたいのではない。あくまで、「命」そのものの在り方が、我々の考えている以上に「連続的」であり、「あるひとつの生と死」でさえも、その連続の中に内在しているのではないか、ということなのである。

「生死の在り方」という人間にとって最も重要な問題に確かなる答えを見出すことは、限りなく不可能に近いであろう。しかしながら、今を生き、これから死を迎える我々は、この重大なる苦悩の意味を考えずして、「生きている意味」を見出せないのではないか。

私は、命の在り様が混迷しているともいえるこの現代社会において、「ノルウェイの森」という一冊の本が、ひとつの道標を示してくれているように思えてならないのである。